

～The wink of history～ 「ガス灯」展

会期:2022年10月1日(土)～12月25日(日)

会場:< GAS MUSEUM がす資料館> 全館

36) 吊下式下向二灯
ガスランプ40) 卓上六角台
ガスランプ46) 吊下式草花飾付
下向ガスランプ53) SCHOTT社ホヤ
「851S」

34) 壁掛式下向ガスランプ

製造:日本 明治末期

35) 壁掛式飾付下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

36) 吊下式下向二灯ガスランプ

製造:外国 明治後期

二灯式ガス灯のシャンデリアです。
植物文様の纖細なアームのデザインと、白バラのつぼみのようなシェードの意匠で、広い室内の中央に備え付けられても見劣りのしない存在感があります。

37) 壁掛式飾付下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

38) 壁掛式下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

39) 吊下式飾付下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

40) 卓上六角台ガスランプ

製造:外国 明治後期

六角形の台座を持つ、小型の卓上ガス灯です。
ピンク色のシェードには、手をつないだ二人の子供の姿があらわされ、かわいらしさを演出しています。

41) 吊下式球形下向大型ガスランプ

製造:外国 明治期

42) 壁掛式ガラス製腕下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

43) 壁掛式ガラス製腕大型下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

44) 壁掛式笠付小型ガスランプ

製造:外国 明治後期

45) 壁掛式飾付大型ガスランプ

製造:外国 明治後期

46) 吊下式草花飾付下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

草花模様と曲線の飾りが組み合わされた、とても優美な吊下式のガス灯です。
本体だけでなく、シェードにも草花模様が施され、空間を華やかにする、存在感のある意匠です。

47) 壁掛式二折ガスランプ

製造:外国 明治後期

48) 壁掛式草花飾付下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

49) 壁掛式飾付下向ガスランプ

製造:外国 明治後期

50) 吊下式下向小型ガスランプ

製造:外国 明治後期

51) ガスマントル各種

製造:日本 明治末期

52) ガス灯ホヤ2点

製造:外国 明治末期

53) SCHOTT社ホヤ「851S」

製造:ドイツ 明治42年(1909)

ドイツのSCOTT(ショット)社製のホヤです。
SCOTT社製のガス灯ホヤは、明治40年(1907)に日本に輸入され、展示品は明治42年(1909)のカタログに掲載されています。日本のガス器具製造会社とは関わりが深く、現在ではビルトインコンロのガラス製天板で、同社の製品が採用されています。

54) EXPORT CATALOGUE No,10

大阪 森高商店 明治末期

55) BLAND LIGHT CATALOGUE 1910-11

名古屋 森商会 明治43年(1910)

56) Welsbacch Light PRICE LIST 1911-12

発行:イギリス 明治44年(1911)

57) Mufterbuch über „Eros“ Hangegas

発行:ドイツ 明治末期

おもな参考文献

- 栗原鑑司『瓦斯及其副産物工業 中巻』丸善 1916年
- 照明文化研究会編『あかりのフォークロア』柴田書店 1976年
- 宮原諄二『「白い光」のイノベーション』朝日出版社 2005年
- 関東信越瓦斯労資懇談会編『続 ガス技術読本』1953年
- 日本瓦斯協会編『都市ガス工業 器具編』1961年
- 中根君郎『がす燈資料抄』1977年
- 東京瓦斯九十年史 東京ガス(株) 1976年

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、2022年度第三回企画展として、2022年10月1日(土)から12月25日(日)までの期間、「～The wink of history～「ガス灯」展を開催します。

1872年(明治5)横浜の街に灯ったガス灯からはじまった日本のガス事業は、本年10月31日に150年を迎えます。明治はじめに、あたたかな炎で文明開化の街に輝きを与えた「ガス灯」は、明治後期から大正期にかけて、室内のあかりとしても普及していきます。

最初は赤い光を放つ裸火のあかりであったガス灯ですが、明治30年代に、ガスの燃焼熱を利用して明るく青白い光を放つマントル式のガス灯が登場すると、広く国内で街灯や室内のあかりとして利用され、大正時代はじめには全盛期を迎みました。やがて電灯があかりの主力となっても、ガス灯は昭和モダンの頃や昭和30年代初めまで、電気を使わない室内のあかりとして、わたしたちの暮らしの中できらめき続けました。

その後、昭和34年(1959)の横浜開港百年記念事業で、横浜の街に2灯のガス灯が復刻されて灯ります。これを機に、街の記憶、シンボルとして全国各地でガス灯が復刻されていきます。今では、北は北海道から沖縄まで、

3,000基あまりのガス灯が夜の街を照らしています。今回の展示会では、明治初頭の文明開化に始まったガス事業150年の歴史のなかで、「ガス灯」がきらめいた(wink)5つの時代に焦点をあて、現代へと至る各時代のガス灯のチャーミングな魅力と特徴を、150アイテムの展示や写真、体験から紹介します。時代とともに暮らしに豊かさと輝きを与え続けてきたガス灯のすべてがわかる特別企画です。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】

学芸員 高橋 豊

W i n k 1 街にきらめく文明開化のあかり

(明治初期～中期)

150年前の明治5年(1872)に、実業家の高島嘉右衛門とフランス人技術者のアンリ・プレグランによって、横浜閥内の馬車道通りから県庁前にかけて、街灯としてガス灯が灯り、日本のガス事業ははじまりました。

二年後の明治7年(1874)は神戸の外国人居留内に、同年末には東京の銀座煉瓦街の通りを照らすことになり、ガス街灯は文明開化の象徴、都市の近代化のシンボルとして人々に受け入れされました。

明治10～20年代にかけてガス灯は、街灯だけでなく室内灯としても普及が進みますが、当時はいずれのあかりも、赤い光を放つ裸火の炎が照らすあかりでした。

1) 東京名所図会 銀座通り煉瓦造

歌川広重(三代) 明治12年(1879)

2) 東京名所之内

銀座通煉瓦造鉄道馬車往復図

歌川広重(三代) 明治15年(1882)

3) 東京開化三十六景 汐留蓬来社

歌川広重(三代) 年代不明

4) 写真「銀座煉瓦街」

明治初期

5) 写真「鹿鳴館」

明治初期

6) 写真「東京証券取引所内 ガス灯」

明治中期

7) 笠付き裸火ガスランプ

製造:日本 明治初期

8) 両用ガスランプ

製造:日本 明治中期

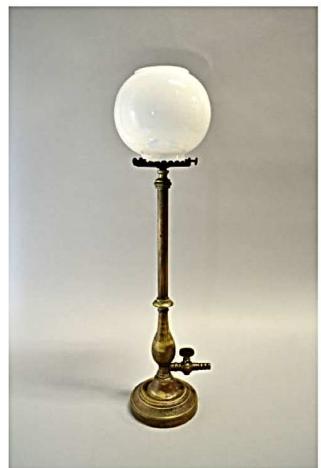
9) 船来上向腕ガスランプ

製造:外国 明治初期

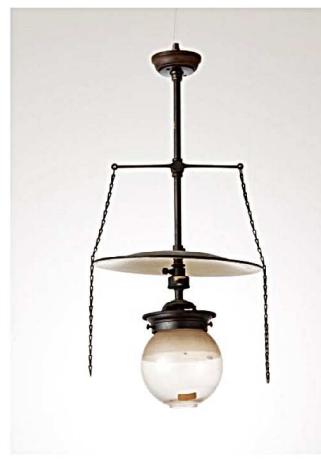
明治16年(1883)建設の鹿鳴館で使われていた、裸火を使用する古い形態の室内ガス灯です。

昭和15年(1940)に建物解体の際、ガス会社の職員が譲り受け、大切に保管した物です。

9) 船来上向腕
ガスランプ



10)卓上上向裸火
ガスランプ



17)吊下式笠付下向き
ガスランプ

10)卓上上向裸火ガスランプ

製造：日本 明治中期

火口を向かい合わせ、炎を衝突させてガスと空気混合しやすくした、衝炎式バーナーの裸火のガス灯です。魚尾灯式と共に裸火式のガス灯では、多く利用されました。

11)吊下式二灯裸火ガスランプ

製造：日本 明治初期

12)卓上上向裸火ガスランプ

製造：日本 明治初期

Wi n k2 暮らしのあかり

(明治後期～大正中期)

明治30年代(1890年末)になると、オーストリアの化学者であるウェルスバッハにより発明されたガスマントルが登場し、ガス灯は新たな進歩を迎えるました。ガスの炎に被せて熱することで青白い光を放つガスマントルは、それまでの裸火のガス灯と比べ、明るくそして、暗闇でも綺麗にものが見える明かりとして受け入れられました。

ほぼ同時期に全国各地にガス会社が設立され、大正時代のはじめには都市部を中心に、9千5百基余りのガス街灯が、そして室内灯としては155万基余りのガス灯が、私たちの暮らしを照らす、全盛期を迎えるました。

13)卓上下向ガスランプ

製造：日本 明治42年(1909)

14)藤原式下向一灯ガスランプ

製造：日本 明治末期

15)壁掛式下向八号腕ガスランプ

製造：日本 明治43年(1910)

16)壁掛式下向ガスランプ

製造：日本 明治末期

小ぶりなガス灯ですが、ホウロウ仕上げのバーナーには草花模様が施され、正面には、「京都瓦斯」の社章が記されています。

またホヤのリボン柄の模様は、ガラスエッチングにより浮き出るように施されています。



16)壁掛式下向ガスランプ

17)吊下式笠付下向き ガスランプ

製造：日本 明治末期

木座を用いて天井に固定する吊下式のガス灯です。バーナーの上には、表が青色、内側が乳白色の笠があり、光を反射する役割と合わせ、ガスの燃焼熱が直接天井に伝わらないようにも工夫されています。

18)吊下式下向ガスランプ

製造：日本 明治末期

19)壁掛式二つ折下向ガスランプ

製造：日本 明治末期

20)壁掛式二つ折ガスランプ

製造：日本 明治末期

築100年を超える住宅に、平成20年(2008)の寄贈直前まで設置されていたガス灯です。居間の柱に穴を開けて設置されており、明治末期の住宅では、和室の柱を利用してガス灯を設置していましたことがわかります。

21)卓上上向ガスランプ

製造：日本 明治末期

Wi n k3 昭和モダンを彩る (昭和初期)

明治のはじめよりガス灯が利用されていた横浜や東京では、関東大震災の影響により、街灯を中心に電灯へ置き換わって行きます。ガスの炎は熱源利用が主流となります。震災復興で建設された住宅などでは、ガス灯を非常用の室内灯として設置する事例もありました。

昭和初期には、コンロやストーブと合わせて、室内灯向けのモダンなデザインのガス灯がカタログでも紹介されました。

昭和モダンの文化的な生活を照らす灯りとして、ガス灯は、当時のガス器具のバリエーションに彩りを添えていました。

22)卓上スタンドガスランプ

製造：日本 昭和10年(1935)

昭和10年(1935)のカタログに「燭臺(しょくだい)」の名称で紹介されています。半孤の腕をもった、美しいシェイプが印象的な、アールデコ風の国産のマントルガス灯です。

平成11年(1999)に、品川区の方より寄贈を頂きました。

23)八号一折腕ガスランプ

製造：日本 大正12年(1923)



22)卓上スタンド
ガスランプ



25)二灯中型スタンド
ガスランプ

24)亥30號一出腕ガスランプ

製造：日本 昭和2年(1927)

Wi n k4 戦後復興を照らす (昭和20~30年代)

第二次世界大戦が終結し、戦後人々の暮らしの復興を支えたエネルギーとして、ガスは重要な役割を担いました。昭和24年(1949)12月にはガスの24時間供給が10年ぶりに再開され、昭和28年(1953)には戦前の最盛期の需要家と販売量を超えるまでになりました。人々は時間制限の無くなったガスでガス灯を灯し、電灯を補足する形での利用が復活しました。戦後のライフスタイルに受け入れられる新しいデザインの室内灯が登場し、高度成長期を迎える昭和30年代はじめまで、ガス灯は当時の人々の暮らしを照らしていました。

25)二灯中型スタンドガスランプ

製造：日本 昭和30年(1955)

戦後の電力事情が悪い時期、電気を使わない夜間照明として、販売されたガス灯です。

女性モデルとともに、ガス灯を撮影した写真が、カタログに掲載紹介されており、一般家庭向けにガス灯の需要があったことがわかります。

26)壁掛式円筒型ガスランプ

製造：日本 昭和戦後

27)壁掛式腕ガスランプ

製造：日本 昭和30年(1955)

28)吊下式ガスランプ

製造：日本 昭和戦後

昭和30年(1955)の東京ガス(株)のカタログで、「ほのかな雰囲気 憐いのお部屋にはぜひ淡い光のガスランプを!」と紹介されているガス灯です。

ガス灯がかもし出す炎のあかりを、空間演出として提案しています。

29)卓上ガスランプ

製造：日本 昭和戦後



30)写真 本町小学校
前のガス灯(2010)



31)写真 山下公園
通りのガス灯(2021)

Wi n k5 街の記憶の復刻

(昭和40年頃～現在)

高度成長期のなか、ガスは人々の豊かで快適な暮らしを支える熱源として活躍します。

一方横浜港開港100年となる昭和33年(1958)に、記念事業の一つとして、横浜の街へ2基のガス街灯が復刻され、翌年の昭和34年(1959)に、再びガスのあかりが横浜の夜の街を照らしました。

日本最初のガス会社のあった本町小学校に立てられたガス街灯は、1基は現在も校門の前にその姿を見ることができます。もう1基のガス街灯は、ガス事業100年を迎えた昭和47年(1972)に当館へ寄贈されることとなり、翌年に移設設置されました。

現在、北は北海道から南は沖縄まで、3千基余りのガス灯*が復刻されています。今、私たちのくらしのなかで、ガス灯が新たな街の景観となる時代を迎えています。 *2014年時点

30)写真 本町小学校前のガス灯(2010)

製造：日本 平成22年(2010)

31)写真 山下公園通りのガス灯(2021)

製造：日本 令和3年(2021)

コラム展示 瀟洒で優美な デザインのガス灯たち

(19世紀～20世紀初)

海外からの輸入品であるガス灯から、日本の生活様式に合わせてデザインされたガス灯など、国内外の潇洒(しょうしゃ)で優美なデザインのガス灯たちを一堂に紹介します。

草木の飾りが施されたものや、シンプルながらキュートな形状をしたもの、ガスの炎を保護するだけでなく、繊細で優美な模様が施され、華やかさや柔らかさを演出する、色ガラスで製作されたガラスのホヤなど、おしゃれなガス灯たちをどうぞお楽しみ下さい。

32)吊下式笠付裸火ガスランプ

製造：日本 明治末期

33)壁掛式一角獣飾付上向ガスランプ

製造：日本 明治後期